

令和4年度 第2回 学校運営協議会（議事録）

I 日 時 令和4年10月29日（土） 10:00 ～ 12:00

II 場 所 静岡県立浜松湖東高等学校 大会議室及び各教室

III 出席者（委員、敬称略）

二川雅登（本校後援会長）、大堀康彦（本校同窓生）、
村松俊司（神久呂協働センター所長）
（オンライン参加）

新井立夫（協議会会長、文教大学教授）、鈴木恵子（NPO 法人魅惑的倶楽部理事長）、
欠席者

新村貴文（神久呂地区自治会連合会長）、山口権治（浜松市教育総合支援センター職員）
本校職員

白井秀幸（校長）、大場誠（副校長）、山崎修司（教頭）、諸井康恵（事務長）

V 内 容

1 授業参観等

2時限授業参観、図書館等施設見学

2 校長挨拶

本日は、御多忙の中、本会に御参集賜り、ありがとうございます。

コロナ禍により、オンライン学習に係る ICT 化は加速的に進化し、今後の生活様式等も間違いなく変わってきます。今年度入学生は新学習指導要領の一期生であるとともに、国の方針である GIGA ハイスクール構想における高等学校開始年度として、1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークが一体的に整備されました。Society 5.0 時代に生きる子供たちにとって、PC 端末は鉛筆やノートと並ぶマストアイテムです。社会のあらゆる場所で ICT の活用が日常のものとなっています。社会を生き抜く力を育み、子供たちの可能性を広げる場所である学校が、時代に取り残され、世界からも遅れたままではいられません。対面と在宅によるオンラインを併用した学習が「学校のニューノーマル(新常態)」となりました。

話は変わりますが、昨年申し上げた通り、学校教育法施行規則が一部改正され、各学校が「三つの方針（いわゆるスクールポリシー）」を策定し、公表することが義務化され、今年度になって、すべての高校においてスクールミッションが公開されたところでもあります。このことについては、本運営協議会にも関係することなので、後程、概要を説明し、スクールポリシーについて委員の皆様からご意見いただきたいと存じます。

本日は、校内の授業の様子を視察していただくとともに、昨年、御承認いただいた「グローバルハイスクール」や重点取組である「探究活動」における、これまでの取組状況報告と併せて、これからの本校の取組について説明いたしますので御協議をお願いします。

教育委員会から任命された委員の皆さまから、学校運営や教育活動について承認いただき、学校運営について意見をいただければ幸いです。本日は宜しく申し上げます。

3 議事（進行：会長）

(1) 授業参観の感想（委員から）

- ・落ち着いた授業態度であった。プロジェクタ等 ICT 機器が効果的に使われていた。
- ・生徒同士が相談しながら授業が進み、いい雰囲気であった。
- ・生徒は一生懸命だった。先生方の個性が授業に出ていた。
- ・先生方が熱量を持って教えていた。多くの生徒はそれを受け止め、真面目に取り組ん

でいた。

- ・スクリーンに映したものが、細かくて後方からではよく見えないものがあり、工夫が必要。

(2) 今年度の取組みについて

ア 学校運営（校長から説明）

「外部リソースを活用すること」が重要である。民間企業でも、外部の専門家や他社の力を借り、自分たちにしかできない仕事に集中するようになってきている。本校を外部から閉じないようにしていくことは職員の負担軽減にもつながっていく。

グーグルクラスルームの学習環境整備と利活用が特筆すべきレベルで進んだ。自宅待機の生徒に対して、グーグルクラスルームを活用し、スタディサプリや動画視聴を課題とする宿題提出もできるようになった。本校の ICT の主な活用は3つある。スタディサプリ、グーグルクラスルーム、オンラインハイスクールである。スタディサプリは、ティーチャーズアカウントで生徒の利用状況把握、宿題配信、到達度テストの分析等を行っていく。グーグルクラスルームは、台風等の災害で生徒も教員も学校に来られない場合でも対応可能な状態になっている。また、グーグルミートにより、オンライン授業でもグループ単位による対話活動ができる。

次に昨年、御承認いただいた「グローバルハイスクール」について、現状の取組を報告する。

本校の特色ある取組の1つと位置付けている。「静岡教弘だより」にも紹介された。異なる他者と共生できる社会の実現を目指している。おもな内容は、外国籍やひとり親世帯で経済的に恵まれない子どもへの学習支援の在り方とフェアトレードについての2つである。

学習支援については、神久呂協働センター、神久呂中学との連携により昨年12月から「コトバショ」という名称で開始した。本校生徒が募集も含め課題解決に取り組み、当初2人だった参加者が15人に増えた。

フェアトレードについては、昨年度ラオスのコーヒー農園の人たちとのオンライン交流をした。また、徳之島のコーヒー農園を訪問して持続可能なコーヒー栽培について学び、開発途上国の栽培について考えるきっかけとした。

8月に日本国内で日本人旅行客に「おもてなし」のアルバイトをしている外国人留学生（スウェーデン、台湾、フィリピン）と、外国人が日本の生活で困っていることについてワークショップを開いた。併せて、国際アカデミー日本語学院池袋校を訪問し、日本に留学を目的に入学している中国人学生の学習支援の授業の様子を見学し、意見交換の場を持った。

意見・感想（委員から）

- ・地域貢献として、とても良い取り組みである。
- ・活動を通して、生徒がどのように変わったかが重要。効果があったか。
(校長) 生徒の意識が変わった。進学して地域貢献を学ぶ、進学後に引き続き活動したい、という生徒が増えているという印象を受けている。
- ・湖東高校への入学希望者が増えるとよい。
- ・中学生が取り組みに関心を持ってくれることを願う。
- ・経験がすぐに生きることがなくても、人生においていつか生きてくると思う。
- ・「フェアトレード」について、知らないでいるとそのまま通ってしまう。関わりをも

って、自分から活動しているのがよい。

- ・地元を愛する気持ちにつながっていく活動である。
- ・プロジェクトに関わることで自分の将来を考えることにつながっていく。
- ・ICT活用により便利になった反面、分かったつもりで身に付いていないことが多い。
そのフォローが大事。

イ スクールミッション等について（校長から説明）

「スクールポリシー」について説明する。令和4年1月の中教審答申を受けて、同年3月に学校教育法施行規則が一部改正され、各学校が「三つの方針（いわゆるスクールポリシー）」を策定し、公表することが義務化された。

文部科学省の発表資料によると15歳人口は年々減少傾向にあり、令和11年には100万人を割り込み、令和18年には約81万人になることがほぼ確実。令和18年はコロナ禍で出生率が激減した年の子供たちが高校生になる年。（資料1）

公立高等学校の配置について、全国の市町村(1,741)のうち、公立高校の立地が0ないし1であるものは1,088(62.5%)。0ないし1の割合が最も高いのは北海道の82.1%、最も低いのは兵庫県の31.7%、静岡県は48.6%、東京は32.3%、神奈川県は48.5%となっている。（資料2）

高等学校教育の在り方ワーキンググループの検討事項。「共通性」と「多様性」の観点からの検討、「スクールミッション」「スクールポリシー」の体现、文理横断的な教育、産業界と一体となった実践的な教育の推進が挙げられている。（資料3）

各高等学校の魅力化として、各高等学校に期待される社会的役割等（いわゆるスクールミッション）を再定義することが望まれるとなっている。（資料4）

本校ホームページにアップしたのはこのことによる。（資料5）

スクールポリシーは令和4年度末までに策定することになっている。

普通科改革として高等学校における普通教育を主とする学科の弾力化として、「学際領域に関する学科」「地域社会に関する学科」とある。（資料4）

普通科を主とする学科としては、「アカデミックなもの」「探究的なもの」「就職を目的としたもの」と捉えている。

本日は委員の皆様はスクールポリシー策定に当たり、本校の目指す方向について意見を賜りたい。本校のスクールミッションは、「地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために、地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに重点的に取り組む浜松市西部の普通科高校として、生徒自身が実際に様々な社会問題と向き合うことで、自分ができるような形で実社会と関わることができるかを体験を通して学んでいくことができる教育を通して、論理力や答えの出ない事態に耐え得る力を身に付け、『自分から、自分らしく、自分の言葉で語れる生徒』の育成を目指す。」とした。

入学生に求める生徒像、教育課程、卒業時の生徒像を3つのポリシーとして、次の運営協議会で素案を示すが、その前提で確認と御意見をいただきたい。

ポリシーについては来年3月までの策定を予定している。これまでに入学者受け入れに関する方針（グランドデザインの目指す生徒像として）「アドミッションポリシー」、卒業までに育成を目指す資質・能力に関する方針（グランドデザインの育成したい資質・能力として）「グラデュエーションポリシー」はできている。教育課程の編成・実施に関する方針「カリキュラムポリシー」を教科単位ではない資質・能力ベースでカリキュラムマネジメントしていけば明確化できる。

方向としては、普通科を主とする学科として「探究的な学習」を軸とした「地域社会に関する学科」と考えている。

意見・感想（委員から）

- ・普通科として何を目指していくのか。湖東高校は大学だけでなく、専門学校進学者が1/3程度いると聞いている。大学進学を主とする学校とは異なり、視野を広くする形でのとりくみが必要ではないか。
- ・グローバル等の取り組みを、全生徒が関われるような形にするとよい。
- ・湖東高校での学びを実社会での実践につなげていくようにしてほしい。
- ・グローバル等の取り組みを、教科で行うのか、総合的な探究の時間なのか、特別活動なのか、整理が必要。
- ・社会では思い通りにはならない。不安な状態に耐えうる能力を鍛えることが必要。
- ・3年間で完璧にする必要はない。
- ・できないことにどう対処していくのが大切。
- ・いろいろな子がいる。どの子も取り残さないような取り組みをお願いする。
- ・「支える」「支援する」イメージをポリシーに言葉として入れてほしい。

ウ その他について（校長から説明）

これまでの運営協議会で述べたとおり、対話による思考過程を把握する授業改善のキーワードは「探究」。この「探究」の深い理解と具体的な実践こそが、「資質・能力」「カリキュラムマネジメント」「主体的・対話的で深い学び」を同時に展開することにつながると強い確信を持っている。繰り返しになるが、本校では課題解決型学習（Project Based Learning）により探究力が育成されるという想定から、カリキュラムマネジメントの推進として、目指す生徒像を「自分から 自分らしく 自分の言葉で語れる生徒」とし、育成したい資質・能力を「コミュニケーション能力」、「関連づける思考力（比較・分類）」「発信力」「論理力」「分析・批判的思考力」「ネガティブ・ケイパビリティ」の6つとした。ネガティブ・ケイパビリティという言葉は、会長の新井先生が提唱者で、正解のない問いを問い続けられる力、言い換えれば負の力に耐えうる力というものである。

また、「総合的な探求の時間」の取組を3年間のプログラムとして位置付け、1年次に「協働的学びのための基礎作り」「ソーシャルチェンジ」2年次に「コーポレートアクセス」3年次に「課題研究」と再構築していくことにした。令和元年度から実施しているが、職員の意識は記述内容から個人差こそあるが、平均としての理解は深まってきている。

4 学校関係者評価

運営協議会の委員の皆さまは、学校関係者評価の評価委員を兼ねています。次回は、自己評価を参考に、関係者評価及び御意見等をいただきますので、よろしくお願いいたします。

5 今年度の日程

次回第3回を2月にお願います。内容は学校関係者評価です。第4回を3月に、次年度基本方針の協議となります。

本日はありがとうございました。次回以降もよろしくお願いいたします。